ロレンスの「聖霊」探究紀行

—「イタリアの薄明」論—

大　川　　浩

はじめに……ロレンスとイタリア

≪旅をする時には西か南へ行くべきである。(「帰路」)。≫ これは十字軍が飽満して戻ってきた以来の真理なのだ。文芸復興ですら，未来への架橋を見い出したのも西の空においてではなかったか。現在でも我々は旅をするなら西へ，そして南へと行かなければならないのである。だからこそ，彼ロレンスは後に彼の妻となった，畏多くもリヒトホーフエン家の男爵令嬢で，ノッテイガム大学教授 E・ウイークリイの妻，フリーダととるものもとりあえず（と言っても，とるものなんぞは，ロレンス，皆無だったのだ）駆け落ちしたドイツはメッツから，西のかた，イタリアへと旅立ったのだ。しかも徒歩でだ。頭上には広大な宇宙を戴きながら，一歩，また一歩と，足下に大地を踏みしめながらのイタリアへの徒歩旅行に旅立ったのは，時あたかも 1912 年 8 月の半頃のこと。後に，ロレンスの妻となったフリーダが，彼との生活をえがいた，いうなればロレンス夫妻の生々しい生涯史とも言うべき「私ではなくて風が……」の中で，このイタリアへの徒歩旅行の事を如実にえがいている。出発してから六週間かかって，ようやくにしてトレント着。ここから汽車でガルダ湖畔，リー

ヴァまで来たのも束の間，翌九月には同湖畔のガルニヤーノのイジエア山荘に移り，以後，翌年4月迄，ここに滞在して，始めて落着いた旅だったのだ。道々，ロレンスは「いづこもバラ」，「山中のめぐり逢い」等の詩作をし，ここイジエア山荘ではガルダ湖の隣村ボリヤッコに，ちょくちょく散歩したり，フリーダの家事を手伝ったりしながら書いたのが「イタリアの薄明」であり，それと同時に「息子と恋人」の原稿を訂正したり，フリーダとの愛の苦渋と成就を唱いあげた「見よ！　僕たちは生きぬいた！」の詩の大部分を書きあげたのだ。尤も「イタリアの薄明」が出版されたのは，これより4年後の 1916 年7月のことだ。

ロレンスは45年という短かい生涯のうち，幾度となくイタリアに足をむけ，滞在している。なぜ，そんなにロレンスはイタリアを好んだのであろうか。

それは彼らイタリア人が知りはせず，また知ろうともせず，只，感じ，欲するだけで，彼らが**無意識的**だからに他ならないのだ。余りに多くのことを知り，多くの思想をもち——いや，知っていると思っているだけだが——己れ自身を忘却し，とどのつまりは，存在し得ていない我々，現代人とはちがって，イタリア人の存在の仕方は**無意識のうちに存在**しているからなのだ。多くの思想をもつ我々とはちがって，彼らイタリアが**強壮な血液**を持っており，非常に**温かい生命**に溢れた人間接触がそこには存在しているからなのだ。手紙の中でも≪貧しくバターを二ペニー，チーズを一ペニーずつ買う。しかし彼らは健康でボートを着けたり，網を修繕したりする小さな広場で，王様のようにぶらつく。そして彼らは誇り高く窓のところを通って行く。急いだり，いらいらしたりしない。そして女達もまっすぐ歩き，落着いた顔つきをしている。……多くの思想は持たないだろうが，健康な顔つきをして強壮な血液を持っている……≫と述べているのだ。それはなぜなのか。彼らイタリア人が≪非常に温かく生命に溢れている≫訳は何なのか。

ロレンスはイジエア山荘滞在中に，接触した数々のイタリア人達——別荘の主人や，その夫人ゲムマや，サントマス寺院の境内で糸を紡ぐ老婆や，デ・パオリ氏を通じて，望ましきイタリア人的生き方の原点を探り，ひるがえって北欧ヨーロッパ人達の意志的な暗澹とし，結果的には虚無のみ生み出すに至った

生き方を中世にまで遡って，凄まじい迄の**直観**と**本能**に依拠して考察し，その陥込んだ悲劇の究極的原因をあっさりと喝破して，生の中枢へと仮借なき**意識探究**を行なうのである。

I　イタリアの「自我なる神」

父なる神は肉をもって，彼自身の姿に似た人間を創り給うた。よって肉は崇高であり，それは神のようなものなのだ。肉と合致する事によって，**肉体存在**と一つになることによって，神と，即ち父と共に在り得るという訳だ。ここに**神即自己**という等式が成立をする。これが異教の主張する真理なのであり，イタリアの立場なのだ。**自我**とはイタリア人にとっては**象徴的な神の具像化されたもの**なのである。**肉の自我，感覚の自我**こそ神の身体であるが故に，神格である自我なのだ。その自我は神なる自我だからこそ，イタリア人は己れの肉のなかにある神性を崇拝する。ここに**男根崇拝**がイタリアに残在している理由がある。イタリア人にとっては**男根**こそが**神性**であり，**創造的根源**なのだ。男根が一人一人の人間の創造的不死の象徴であり，各個人にとっての神性なのだ。

人間のうちにある最も深い衝動，即ち宗教的衝動は，己れ自らが不滅存在となり，無限になって完成することである。その衝動は理想の遂行，確固たる進歩によって充たされる。その進歩において，人間は満足し，その一歩ごとに人間は目標たる無限に，不滅性に近づいて行くのだ。それならば果たして神なる自我における完成とは何なのか。言わずと知れた崇高なる自我についての最高の理念，自我神についての最高の観念の実現だ。換言すると，一個人としては生の全秩序を成立させ，生に対する統制を帝王の如く，はたまた，**崇高者**の如く，**貴族**のように行なうことであり，政治的集団もまた，この肉の崇高さ，栄光をもって染められ，神の如き権勢と力量とを与えられた実体である**帝王，皇帝**のうちに，その完成を見い出すのだ。この集団においても，個人は強力な**皇帝**であることという最高の理念を実現して，始めて完成され，成就されるのだ。これぞ，まさしく異教の独創的な喜びであり，自我の喜びなのだ。**あらゆる権勢と栄光とを自我に集中し，万物を自我の中に吸収することによって不滅**

存在になるという古い法悦，古い我の完成，タビデの法悦。これがイタリアの異教の自我たる神の無限であり，不滅なのだ。

だがルネッサンス以後，イタリアは北方の他我という新しい神によって圧迫され，異教の生命の秩序は根元から枯れ出して原始的状態，即ち肉の崇拝とその法則の実現された状態への逆行をやらかしてしまったのである。それは**感覚**を崇拝し，絶対者としてあがめることだ。**感覚の女王アフロデイテ**は海の泡より生まれた**感覚**の微光であり，海の燐光であり，**感覚**それ自体を目的としている。それは微光する闇であり，輝く夜であり，破壊の女神であって，その白く冷たい光は消耗するだけであって，何ものも創造はしないのだ。これぞ，ルネッサンス以来のイタリア魂なのだ。そして今や，**肉と感覚**は自らを意識し，目的を持っている。その目的とは何か。それは無上の感動にあるのだ。肉が還元すること，肉がクライマックスに，恍惚における燐光的な変形に自らを反応させることを求めることだ。かくて**アフロデイテを崇拝**するのだ。それは，たとえてみれば，あらゆる生肉をくらい尽くし，己れにとって今は無であるものを盲いた，激しい放心した眼をもって，にらみつけ，その無限の檻のなかで，うろうろと動き廻っている崇高な**虎**なのだ。他の生命を己れの生命へ吸収せんとする破壊の恍惚——その恍惚こそ遂には永遠の炎，不滅者，不滅者の炎となり，その時，始めて虎は満足する——を求める意志をもった**虎**なのだ。これが肉の崇高さであり，はたまた，官能の不滅のクライマックスなのだ。**虎**は崇高である。その頭は頭骸骨の上を，何か非常に重いもので圧されている様に平べったいのだ。その重いものが心を石の下に圧しつけて，血にかえるように圧迫しているのだ。心は沈圧された血の道具なのだ。イタリア人にとっての心は，終始，**感覚の奉仕者**なのだ。心——それは沈潜し，圧倒されているのだ。しかるに**感覚**——こいつは非常に高慢なのだ。**絶対者**なのだ。

己れは決して他人の感覚を持ち得ない。**感覚即己れ**なのだ。己れの感覚が絶対的な己れなのである。存在するものは総て，己れの感覚をとおしてのみ，自分に達し得る。かかるが故に，総てのものは己れであり，己れの管理化にあるという訳だ。他のもの，即ち己れでないものは**無**なのである。これがルネッサンス以来のイタリア人の立場だったのだ。だからこそ彼らイタリア人は数世紀

の間，北方ヨーロッパ人の**計画的な工業**を避けて来たのだ。そんなものは，彼らイタリア人にとっては**無**とみえたのだ。だが避けられたのも数世紀の間でしかなく，イタリアの**自我たる神**は，彼らの誤たれる**男根崇拝**と破壊的な享楽に蒸溜する**感覚生活**のため，さらには北方人の**他我たる神**によってメッタ討ちにされて破壊され，迫害され，かくて，**王**，**貴族**を中心とするイタリアの古い社会体制は倒壊することになるのである。

II　北方民族の「他我なる神」の台頭とその猛威

中世のヨーロッパは，キリスト教的自己否定と虚心に到達せんと努め，そこにおのずと完成という観点をい抱くに至った。その運動は常に只一つの方向，即ち**肉の排棄**という方向に向かって驀進していたのだ。**肉の排棄，肉体の自我，自我なる神を補足する他我の神**の台頭こそ，これだ。他我なる神，それはイタリア人の信奉する神なる我よりも，北方ヨーロッパ人にとっては大いなる神なのである。**神は他我**なのである。これぞキリスト教的真理なのだ。この**他我を完成することによって己れは完成され，無限存在**となるのだ。各個人は矮小であり，破片みたいなものでしかない。そんな中には神などは存在しないのである。よって個人は大いなる人類全体に己れを没入しなければならないのだ。己れの自我を滅して，自己を犠牲にし，隣人を自分自身の様に愛して，己れ以外の全体と一つのものになる時，完成は成就され，神と一となり，無限となる。それは**他我の中への，隣りへの，自己放棄と溶解とによって到達される新しき神**なのだ。精神が再び甦り，不滅になり，永遠と化し，無限となるためには，まず第一に，死が行なわれなければならないという訳なのだ。肉は死に，自我を滅却しなければならないのである。そこには有限の我は，最早，存在せず，あるものと言えば，ただ**無限なる自我，永遠なる自我**の存在のみ。旧い法悦，旧き自我の完成，ダビデの法悦，あらゆる権勢と栄光とを自我に集中し，万物を自我の中に吸収することによって不滅になるという異教の自我神は，中世においては**自己犠牲という方法，偉大なる他我の中に吸収され，溶解されてしまう方法によって到達されるキリスト教的永遠**によって押し除けられ，ルネッサ

ンスに至って，この半面の真理であるキリスト教真理が他の半面の真理たる異教の真理を圧迫するに至ったのだ。神は只一つしかない。他我の中で，否定し，完成するキリスト教の神こそ唯一無二の絶対の神なのだ。しからざるもの，旧き誇りは永劫に処罰される。罪の中の罪，それは誇りであり，強慢だ。しかるに異教徒は高慢の上に，生活を礎いたのであった。よって異教徒は永劫処罰をされなければならないという訳なのである。

かくして，飽くことなき異教絶滅へのキリスト教軍団による進軍ラッパが，子なるイエスと母なるマドンナを頭上に戴いて，高らかに鳴り響き出すことになったのだ。「われわれはキリストにおいて一つである。もっと前進しよう……」という訳で，前進，また前進，前進あるのみ。他我である神への宗教的信念を実践するのだ。この信念に基づいた現実の生活様式を造りあげる実践活動に向かって前進あるのみ！　現に，サヴォナロラとマルティン・ルターによって教会は変革された。「教会は存在せず，ただ国家が存在するのみ」とほざいたヘンリー八世の確信も虚しく，シェイクスピアにおいては，変革は国家にまで及んだのであった。他我なる神への宗教的信念の，すさまじい迄の実践活動は，**異教の自我なる神の完成，頂点であり，完成せる我の代表者，あらゆる生命の最頂点，完成せる存在の象徴，ふさわしき最高者にして神の如きもの，無限なる帝王，父を，**ものの見事に打倒してしまったのだ。異教の自我神の無限なるもの，そんなものは，新しき他我の神によれば，無限でもなければ，その完成も完成なんて代物ぢゃないのだ。そんなものはみんな謬れるものであり，偽りであり，嘘っパチなのだ。くだらない，まやかしであり，腐敗しているものなのだ。そんなものは無くなってしまわなければならないという訳なのである。

この観点から，ロレンスは，シェイクスピア後期の作品全部の中に，この冷たい，自己嫌悪の調子が漂よっているのをみてとるのである。それは一種の肉の腐敗であり，そこからの意識的な脱出なのだ。父であり，王であり，皇帝である己れの肉体の自我神が謬れるものとされ，偽りときめつけられ，無とされたことから生じた自己嫌悪であり，肉の腐敗なのだ。ハムレットの狂気――それは肉の腐敗の意識が，彼を狂気にさせたので，復讐に悩んだためなのでは決

してないのだ。ロレンスは，こう説明して，歴代の無数のシェイクスピア学者による卓越したハムレット批評史には全く，あてはまらない様な，いやらしいハムレット考を，イタリア人エンリコ・ペルセヴァリの演じる“アムレット”をみて，平然と述べ出すのだ。ロレンス観点からみたハムレットは疑い深く，孤独で，自己嫌悪を感じており，肉体腐敗の線にそって努力しているのだ。だがハムレットはそれが，己れの肉であることを決して認めようとはしないのだ。自己嫌悪を変形した自惚れを持ち廻って腐敗を暴露することに満足を覚えているのだ。じっと隣人の腐敗を眺めるのだ。近親相姦や不節操を発見したことを己れの母親に知らせたり，近親相姦を犯した王を苦しめながら，じっと眺めたりするのだ。従って，ロレンス，ハムレットこそは≪あらゆる穢れた人間共の中で，最も穢れた人間≫だときめつけるのだ。ハムレットは，それにも拘わらず，他人ばかりを責めるのだ。ゲーッとしてしまう。名優フォブズ・ロバートスンがハムレットを演じようが，彼ロレンスにとってはハムレットは嫌悪の固まりでしかないのだ。≪こそこそした不潔な奴，意地悪く母親にくってかかったり，鼻先であしらったり，王に対して艮をかけたり，恋人オフリヤに向かって身勝手な曲解を押しつけたりして鼻持ならない奴≫なのだ。ハムレットのかかる性格こそは自己嫌悪と崩壊の精神の上にのっとって作られたものであり，着想そのものからしてロレンスにとっては全く不快極りないと感じさせるのだ。ハムレットは極端な自己嫌悪，彼自らの肉の憎悪に悩んでいるのだ。ハムレット劇は，いうなれば，ルネッサンス時代の哲学上における立場の叙述なのだ。心の肉に対する，**精神**の**自我**に対する反動の叙述であり，偉大な**貴族主義**の，偉大な**平民主義**に対する限りなき反動の悲劇なのである。従って“to be or not to be”という問題は「生か，死か，そいつが問題なのだ」などということを意味するのではなく，それは**崇高なる自我**，即ち**帝王**たらんか，父たるべきか，あるいは**他我の神**となり，肉の自我を退りぞけて，**精神**によってのみ存在し，人類の中に埋没させて，それを**完成**し，**無限者**となるかという問題なのであり，その結論は当然，“no to be”となるのが，ルネッサンス人達にとって，哲学上，避けることの出来ない結論だったのだ。ましてや，ハムレットの様な意志をもたぬ魂の到達しなければならない自滅的な結論なのであった。か

くしてルネッサンスに至って，**王，皇帝**は人間の魂のなかでは死滅し，昔の生命の秩序は根元から枯れ果ててしまうことになる。その立役者となったのが他ならぬクロムウエルによる，自我の神に対する最後の猛烈な攻撃なのである。チャルーズ一世は，ハムレットの父と同じ様に，神権によって古い帝王の位に就いたのだ。それ以外には，チャールズ一世には非難されるべき点はなかったのだ。だが彼は今や，人々が狂えるごとく憎悪する，生命の古い組織の代表として，首をちょん切られてしまったのだ。神権によるチャールズ一世の首が刎ねられた時，彼らは**象徴的に神の具像化である自我，肉の自我，感覚の自我，ランランと燃える虎であり，王であり，主であり，貴族である自我，神の身体であるがゆえに，神格である自我**を永久に破壊したのであった。

清教徒時代以後，世界は一転し，自我の否定によって得られる**他我の神による完成**という新しい目的，新しい理念に向ったのだ。かかる信念に基づいて，世界は新しい国家を，新しい政治的な団体を形成し出したのである。即ち**自我の存在してはならない場所**だ。**王**や**君主**や**貴族**も存在してはならないのである。自我が存在することは金輪際，許されないのだ。至上なるもの——それは**他我**であり，己れでないものである。ここから必然的に国家を統治する原動力は他人のためという考え方が生まれ出したのである。共存し共栄するという奴だ。クロムウエル以前は「**王のため**」だった。なぜなら人間はみな王において己れらの完成を見い出したからだ。だがクロムウエル以後は「**隣人のため**」「**人民の幸福のため**」「**人類の幸福のため**」となったのである。これと平行して，この新しい目的，新しい理念を正当化すべく，北方英国人は，異教を退りぞけ，他我なる神のため，清教徒以後，数々の論拠，教条を蒐集して来た。己れの欲望を満たし，その至上の感覚を満足させるためには己れ自身を表現しさえすればよいとする「人間は宇宙の縮図である」という異教の論拠は，アレキザンダー・ポープの「汝自身を知れ，神を究めんとするなかれ。人間の研究対象は人間たるべし」という他我神のための論拠の前に膝を屈してしまったのだ。人間が大いなる抽象者である人間を知ろうとすることは正しい。その時，人間は完全である。**知識**を得る方法は自我の分析，即ち破壊であるという訳なのだ。かくて「人間は宇宙の縮図」は分析され，破壊されて一蹴される。「人間

の研究とは人間研究である」という，この他我を知ることによる完成は「汝の隣人を汝自身の如く愛せよ」とイコールとなり，スチアート時代の「人間は彼自身の我を表現することによって完成し得る」という教訓は悪しきものとして排棄されるに至ったのだ。

この他我神による自己完成という精神は近世に至たって経験的，観念的な哲学的方法へと展開する。存在するものはみな意識である。確かに個人の意識の中では人間は——といっても，抽象化され，観念化された，お化け人間のことだが——偉大であり，無限であるが，各個人——実在せる人間——は矮小であり，断片でしかない。従って個人は大いなる人類全体に己れを没入しなければならないというシエリーの精神主義がこれだ。かくの如く，次から次へと他我の神の論拠が提出されるのだ。「汝自身完全なれ，天に在ます神の如く完全なれ」，とか「我は今，知ること少なし，されどやがては，今，我の彼の知らるる如く，完全に知ることを得べし」……等々。人間があらゆることを知り，それを理解したならば，彼は完全であり，人生は祝福されるべきであり，また，あらゆることを知り，あらゆることを理解することが出来るがゆえに彼は無限の自由と幸福を望むことが許されるという聖ポールの誠に有難いお言葉だ。次にはこの新しい宗教の大インスピレイションは自由というインスピレイションを吐き出した。己れの有形の肉体と有限の欲望を消滅させ，蒸溜させた時，丁度シエリーの「雲雀」の様に，空中に溶けて天地の間を歌で満たした時，人間は完全であり，無限の中に完成されるのだ。それがことごとく，他我になってしまって始めて，人間は完全に自由であり，有限であることを知らない存在になるという次第。それには一つ，しなければならないことがある。自我を否定することだ。近代に至って，この宗教的信念が表現されたものは，他ならぬ科学であった。**科学とは外にある自我の，本質的な実体の外界の分析**であり，その科学から生み出された**器械**は，**大いなる再造をされた自我なき力**なのである。だからこそ前世紀も末ともなると，器械的な力に対する激しい崇拝が起こったのだ。

そして，とどのつまりはどうなったか。現在はどうなのか。異教の自我を服従させ，征服し，分析し，破壊し，異教の神性たる創造的根源である男根以

上の，物理的な力量と科学の秘密を発見して，この科学と機械と完全な人道——自我なき完全で平等な人間意識——を目的として，社会改革方面に力を尽して進んで来た結果はどうなったのか。現代の人間は完全な，自我のない人間社会に到着しようとする，由緒ある，かつ立派な意志をもち続けてきた結果，哀れ，**非人間的**になってしまい，己れを支えていることが出来なくなってしまって来ているのである。今では我々は完成の途上に造った**機械化された社会の隷属物**に過ぎないのである。この機械化された大社会には，見ん事，自我がなく，従って憐れみの一片だにないのである。機械的に作用して，我々を破滅させたのである。タハッ！　我々が崇拝して来た**主**であり**神**であるものが，こんなものだったとは！　世界はどうなるのか？　機械による，恐るべき自然生活の破壊が世界を征服しつつある。世界の魂は黒く汚れ，そして干え上り，疲れ果て殆んど消耗してしまっているのだ。世界は今や外界の征服に飽満し，自我の破壊に満足し切っている。おびただしい，崩壊した人間の群れが，このなかで，沸騰し，急速に死滅しつつあるのだ。そして恐らくや，最後には世界が巨大な廃墟をもっておおわれ，不思議な工業上の考案によって切目を入れられて，全く潰滅して，人類は完全な自我のない社会への最後の足掻きのうちに溺れて消滅し去る宿命にあるのだ。これが現代の我々の姿であり，ロレンスが「チャタレイ夫人の恋人」の中で述べている≪現代は悲劇の時代≫なのだ。

Ⅲ　自ら誤謬にみち，北方意識に強姦され崩壊の深淵を彷徨するイタリア

イタリア人の崇拝する男根とは創造的な神性の象徴だ。真実の男根崇拝の精神は，あらゆる生命を吸収し，支配しようとする。だが，それはまた，己れ自身を死に直面させ，死を知ろうとする熱望でもある。即ち死をして彼らイタリア人の中にある，余りにも強い血の支配を破壊させ，もう一度，前進の精神，結合の精神，混乱の中に秩序をたてようとする精神を外界に解き放とうとすることなのだ。それは丁度，肉が新しい生命を生むことによって混乱の中から新しい秩序を創り出すように，彼らを自由に放ち，更に偉大な理念を知らしめその許に働かせようとするのだ。これが男根崇拝に関する真理なのだ。そしてこ

の限りにおいては確かに男根は創造的な神性の象徴なのである。だがドッコイ，イタリア人はとんでもない誤りを犯してしまったのだ。この創造的な神の一部分だけしかを代表しない男根を全体の代表に祭りあげてしまったのだ。**もう一つの男根の神，即ち世界に新しい理想の芽を送る精神**は否定され，陰蔽され，無用視されてしまっているのである。**前進して無の中から新しい世界を創り出そうとする魂**は無力なのだ。只，ひたすら，**官能**に戻って行くだけのことになってしまっているのだ。イタリア人が芝居をみても，問題にするのは情緒だけなのである。最高の満足を与えるものは感動であり，言葉が彼らイタリア人の血の上に及ぼす生理的影響だけなのであって，心はいささかなりとも関与しないのだ。求められるものは，**官能的満足**のみ。だからこそイタリア人は微光する闇であり，輝く夜であり，**感覚**それ自らを目的とする**破壊の女神アフロデイテ**を崇拝するのだ。女神のその白く冷たい光は消耗するのみで，何ものをも創造しないのだ。これがルネッサンス以来のイタリア魂なのだ。それゆえにイタリア人は陽光の下にあっては安眠をむさぼって，血管の中に葡萄酒を注ぎ入れ，夜ともなれば法悦にも似た官能的な喜び，闇と月光との白く冷たい恍惚，嗄れた猫のような，破壊的な享楽に蒸溜するのだ。感覚は苦痛を意識して醒め叫喚しているのだ。これがルネッサンス以後，イタリアを含めた南方のラテン民族を消耗させてしまったのである。

世界を創り出そうとする魂を欠いた**男根崇拝意識**が浸透しては，**異教の自我の完成たる王，帝王**を頂点とする中世までの社会体制はおのづと崩壊する要因を孕んでいたのであった。更にその上，北方民族の標榜する，**慈悲なく，仮借なき，新しき他我の神**によって追い討ちをかけられ，クロムウエルによってメッタ討ちにされてはたまったものではない。イタリアの男達に世界を創造する魂が缺け感覚のみを目的とする男根崇拝では，いづれは，女達によって軽視されることになる。「あんたも好きね」という訳である。無でしかない男根のために，哀れ，女は今迄，犠牲になって来たのだ。オフリヤがそうだし，ミネハハがそうだ。イフゲイニヤもその例外ではない。そこへもってきて自我なき，男女の**平等の観念**をひっさげて，**他我神**の御登場ときた。それっとばかり，この観念を頭につめこんだ女達は，復讐する時は今をおいては他にないとばか

り，**男根崇拝の最高の理念存在たる王**，帝王を打倒することになる。シェイクスピアのなかで，父ハムレット，オセロ，マクベス，そしてリヤ王が女達によって倒された様にだ。

この様なことをロレンスは，彼の凄絶なる**直観と本能**で，日曜日に散歩する若きイタリアの男女や，招待された田舎芝居が上演される寺院に群がった村の男達や女達の中にいとも簡単に見透してしまうのだ。男達は裸にされている様な感じなのだ。彼らの弱々しい存在が露出され，しかも彼らはそれを庇護する力が全く無い様に見うけられたのである。肉体の感覚の鋭さに精神が伴なわない哀れさなのだ。女達も男達と同様に固まって開演をまってはいるが，それは頑固な力強い一群を形成している。権力，冷酷さ，勝利がこれらのイタリアの一村落においてすら，冷酷に執念深く結合している女達と共にあるのだ。そして男と女はどうにも避けられない必然性が課せられ，怒りと荒々しい破壊的な激情をもって一緒になる。日曜日には落着かない，いらいらして気の進まない若者達が寄りそうこともせずに散歩する。心からの恋愛などないのだ。結婚の必要への譲歩からのみの必要最低限の散歩なのだ。結婚すると夫と妻は徹頭徹尾，**性の戦い**を開始する。肉と肉は結合する。**男根**は崇高だからだ。だが**精神**は**無**に帰し，互いに致命的な闘争を開始して**無**となるのだ。それで女達が**立法者**となり，**最高の権威**となる。女達，それは**生産的な母性愛の権化**となって，**男根崇拝に根ざした男の自我**をひき倒すのである。北方の他我の神がもたらした**自由**，**平等**，そして**機械**は女達をして，今迄の男根の単なる容器から，一足飛びに**平等存在**となり，マリアの様に北方の機械によって生産される新しい秩序と金銭によってのみ生きる意識になるのだ。マリアは古い固定した考えから脱却し，人生の無限の可能性を求めて，農民の惨めな生活に反抗し，金銭だけが現実の差別，分離であるとし，息子達をアメリカへ，鉱山へと行かせる様になったのだ。その夫パオロは蔑視されぱなしなのだ。なぜなら，パオロは土地とオリーブの樹に頼って生きているからだ。大地は主のもので，豊作は神の御心であったのだ。不作とて同じこと。もし油とワインとソーセイヂとを家に貯え，存分に食べることが出来れば主と共に喜こんだのである。かくして一個人にとってのパオロの帝王，王たる地位は女マリアによって，家庭の内にあって

も，崩壊することになる。

その上，近代になって，他我の神は科学の秘密を探ぐり当て，機械を生み出し，世界は工業世界となって，イタリアに侵入して，工業と生産によってイタリアを犯し，徹底的に壊滅状態をイタリアにもたらして，イタリアの古き社会——**崇高なる神，父にして主なる神の貴族社会**——は消え去る運命となってしまったのである。家族は食物を，油を，ワインをトウモロコシを，最早，運命の手によって動かされる大地からは得られないのだ。大地は無視され，**工業と機械が生み出す金銭**にとって代わられてしまったのである。**紳士の社会に**かわって，今では**富の社会**が存在するイタリアへと変貌せざるを余儀なくされてしまったのである。農民はその地位を失い，労働者がその地位を占める事になる。古い生活様式，**異教的な様式の優越**は崩解し，**己れの死と社会愛とによる永遠の生命を説くキリスト教**と，それにまつわる諸々の**観念と機械**のために，イタリアは犯されぱなしなのだ。人類の工業的な蔓延は，餌を求め，利潤の匂を臭ぎ当てる。その貪欲なる作用は，やむことを知らない乾燥した風化作用となる。農夫が突然，家を捨て，労働者になる。ならざるを得ないのだ。その途端に人間は己れ自身を奴隷仕事に身売りすることになる。何の目的もなく，何の意味もなしに，道路を作ったり，石切場や鉄の山や鉄道線路とやらで奴隷仕事をしたりするばかりとなる。一人一人に金を得させ，古い生活様式から逃がれる他は，何の目的もなく，ただ単に労働の機械と化して，その生涯は単なる野蛮な労働で終始する。道路や鉄道が作られ，鉱山や石切場が掘られる一方，生活の機能，社会的な機能は乾蝕作用のように，見るも恐ろしく除々に崩れ，落ち込んで，個々の人間は便所の中の蛆のように，崩壊のなかに蝟集している様になってしまうのだ。残るものと言えば道路や，鉄道や工場等の大組織ばかりとなる。それらが作った鉄の枠組のために社会全体がはさまれて砕け散ってゆく様なものなのだ。

かくしてイタリアの古い組織は除々に崩壊作用の過程にはまり込んでしまっている。その崩壊の真只中にあって，感覚の人イタリア人はどうすればよいのか。戸のスプリングを修理してやったロレンスを工業国英国の代表として感心した様に機械の前に為す術もなく，只，ひたすらに機械を崇め，三拝九拝し

て，北方民族の様に，自我を超えて偉大な非人間的な他我に到達し，**生命なき創造者である機械**を，肉以前に存在していた自然の原動力の中から創り出し，偉大なる人間によって発明された**非人間的な力を生み出す機械**を，その機械による**生産**を，**金**を，そして**人間の力**を求めるべきなのか。大地を鉄道でくくりつけ，鉄の指で耕して，大地を征服し，それを己れの手中に収めた人間の喜びを求めるべきか，はたまた，感覚のみを唯一の目的として，この中で燃焼し，感覚の絶対者に属して，破壊の恍惚の中で陶然とすべきなのであろうか。

Ⅳ　異教とキリスト教の架橋…「聖霊」を求めて

“生か死か”はハムレットにとっての当面の問題であって，我々の問題ではない。少くとも言葉の同じ意味においてはだ。我々にとって問題なのは，如何にして「**存在**」すべきかという事であり，また，いかにして「**非存在**」であるべきかという事だ。我々はどう生きたらよいのであろうか。何に縋って生きたらよいのか。北方の他我の神にか，または南方の父なる神，自我の神によって生きるべきなのか。「生か，死か，そいつが問題なのだ」。我々は両方を満足させなければならないのだ。≪長崎が駄目なら神戸があるさ≫などと，嘯いて，根無草よろしく乙に気取っている訳にはいかないのだ。だが北方の神たる他我の神のみを絶対なものとして進んで来た結果，人間は**非人間**と化し，完成の途上で生み出した**機械化された大社会の隷属物**となり，今では**金と機械と賃金奴隷の現代「文明」**と成り果てゝ，前進するには全く疲労困憊してしまっている。そして自棄糞になってほざくのだ。「こんな冒険はもう止めて，イタリア人の様に肉を愉しもう」と。所がドッコイ，自我たる神を信奉したイタリア人は感覚のみが最終の目的となって，そこには世界を創造し，新しい目的，新しい理念を生み出す精神は全く欠如してしまっているのだ。あるものと言えば，破壊と消耗だけなのだ。

では，どうすればよいのか。ニーチェの様に，昔の異教の神に帰り，この神こそ至上のものと言えばよいのか。または「神などというものは絶対存在しない。只一つ絶対的なものとは方便である。感覚と刹那的ということこそ只一つ

絶対的なものである」という功利主義者の次元で生きればよいのであろうか。それとも運命のまゝに，一つの生活様式から，他の生活様式へと送られる罪人のように，安定の場所もなく，弾道の中にある魂を抱いたまゝ，アメリカやヨーロッパを流浪したり，イタリア人ギセピノのように政府の無能に気付き，懐疑的になって，新しい無政府主義を標榜して生きればよいのであろうか。

我々は混同してしまっているのだ。恐怖し，無意味になってしまっている。二つの目的を混同してしまっているのだ。**人間は嘘吐**である。**二重の馬鹿者**なのだ。そこに混同の原因があるのだ。**他我の世界**を崇拝し，**我のない神**に奉仕し，**他我との精神的合一**を崇がめ，同時に，**荘厳なる自我**になろうとして，自我に助けを求めようとするのだ。**機械**の前に畏縮し喜んで奉仕しながらも，**虎**の所業を真似るのだ。混乱以上の混乱であり，想像さへつかぬ地獄の中にはまりこんで，のたうち廻っているのだ。機械的な無我の一方の極点に到達すると，我々は直ちに超越的な自我のもう一つの極点を抱容し始める。同時に両者を兼ねようとするフテエ野郎なんだ，人間て奴は。同時に**虎**でもあり，**鹿**でもありたいのだ。無。そんなことは無なんだ。永久に別個のものを，どの一つかによって，他を中性化しようとするのと同じことだ。**獅子**と**羊**を一緒に寝かせようとする様なものなのだ。**帰依という精神的恍惚**と**肉における偉大な完成を目ざす官能的恍惚**とは別個のものなのであって，決して混同されるべきものではないのだ。だが現状はまさしく，その混乱のなかで右往左往している有様。己れ達の子供を「**未来**」と呼んで奉仕するか，さもなければ依怙地になり，破壊的になって，肉を破壊して喜びを見い出すようになってしまっている。子供とか餓鬼共——そんなものは「未来」ではないのだ。**生きた真理こそが未来**なのだ。時とか人間とかが**未来**を創るのではないのだ。ましてや後退は決して「**未来**」である筈はない。**個人的な欲望を充す他，何の目的もなく成長する子孫達**などは過去の崩壊作用でしかないのだ。**未来は生きた，成長しつつある真理の中にある**のだ。

褐色の皮膚のイタリア人が夜と月との下で，恍惚としており，眼の碧い忙がしげな老婆が，陽光の下で恍惚としており，それら二つのものをつなぐと考えられている庭の僧侶達は平均の中性さのなかを往来するのみ。どこにも一致点

がないのだ。「紡ぐものと僧侶」のポイントもこゝにある。人間にとって日を悦びにし，夜を悦びにし，恍惚と恍惚の合流を望み，月下の恍惚によって一個の身体を放棄し，また魂をも放棄する崇高な法悦は何処にあるのか。**太陽と暗黒**とを，**精神**と**感覚**とを結合する超越的な**叡知**は何処にあるのか，**生きた真理**はどこにあると言うのか。真の絶対者とは何者なのか。これぞ，ロレンスが追求する生きた真理，「**聖霊**」に他ならないのだ。**無限なるものは今や二重になってしまっている**のである。異教の無限とキリスト教の無限だ。**父と子，闇と光，感覚と心，魂と精神，自我と他我，鷲と鳩，虎と羊**がそれだ。従って，人間の完成は二重になされなければならなくなってしまったのだ。**自我と他我**との双方においてなされなければならないのだ。感覚の奥底にある自我の中への暗黒の源泉を溯ることによって到達する原祖，即ち創造的無限と己れ自身の感覚即ち自我を排棄することによって，到達される精神の合一という究極の無限，それが我々のもつ**二つの完成**であり，神へ往く**二つの道**なのだ。**人間の二重の完成**とはこの双方の道を知る事にあるのだ。二つの無限は常に関連はしているが，勿論，決して同一のものではない。我々は神の二つの本質たる二つの無限性の間の関係をひっちゃか，めっちゃかに混同し，挙句の果てには遺棄してしまったからこそ，混沌としてしまっているのだ。**二つの道，二つの無限性，二つの完成**を三角形の底辺の様に結ぶものこそ，他ならぬ「**聖霊**」なのである。**父と子と聖霊**という**三位一体**におけるその「**聖霊**」だ。これのみが永遠なるものであり，絶対なるものなのだ。「**聖霊**」のみが，神の二重の本質を区別し，かつ連絡せしめ，二重の無限性を一つの全体に参与せしめるのだ。二つのものは**第三者**即ち「**聖霊**」の介入によって始めて一つのものになるのである。二つのものを知る事によって，全体を認められ得ることになるのだ。だがその一つを否定すれば，全体を否定することになる——現代の様に。それら二つのものを混同すれば無になるのだ。「**聖霊**」**こそが神の二つの本質，二つの無限者を結ぶ，真の絶対者**なのだ。異教の無限は無限であり，キリスト教の無限も無限なのである。それが我々のもつ二つの完成なのだ。その両方において我々は完全になり得るのである。それぞれの宇宙の両半面なのだ。それら二つのものを関係させ，二つの絶対者を共に存在させるもの，それがロレンスの求

める「**聖霊**」なのであり，この「**聖霊**」こそが生きた真理なのである。

おわりに

現代の旅，それは**頭による旅行**でしかない。**大脳表皮**における旅なのだ。我々の旅行は，今日では，**観念**において営んでいるだけのことでしかない。心底においては旅をしたい気もなければ，旅をする必然性，内なるものから湧きあがる旅への渇望などは，さらさら無いのである。旅にまつわる解放感，安緒感が今では風化され，摩滅されて，旅にいざなう国鉄のギラギラした美麗な，欺瞞的ポスターになったり，お徳用の周遊券になっているだけの事でしかない。時間と金銭が現代の神だからこそ，世界に誇る新幹線——恥かしいことだ，機械に誇りをもつなんてことは——という科学が生み出した機械に乗せられ，遮二無二に一定コースの，いわゆる名所，旧蹟をみて，知り，それで終り……。感動なんてものぢゃないのだ。白々しい疲労感と虚脱感が残るのみ。そしてまたどう言う訳か旅には豚の背中にべたりとくっついているダニの様に，享楽という奴が粘着している。だからこそ旅行にはどんな所であれ，画一的な享楽場所があるのだ。すし屋，バー，ストリップ劇場，土産物店……等々。そこでは旅行者が，石から絞り出そうとする様に享楽を絞り出そうとするのだ。**生ける感動**が無いからこそ，我々は生きている確証を求めて，感動を求める。勿論，**観念化された感動**だが。だからこそ，徒来にないほど，今日では競輪，競馬，競艇が大衆化されるほど蔓延っているのだ。生きている実感を求めようとする意識の悪足掻が生み出した刹那的な享楽機関なのだ。逆からみれば，現代は**虚無**と**倦怠**にむしばまれて，無に明け，無に暮れているという事になる。虚しいからこそ感動を求めて，旅に出，馬に賭るのである。だから一定コースを巡回した所で，みて，知っただけのことで，所詮，知識の積み重ねでしかないのである。虚しい事においては何の変りもないのだ。行った，見た，知った——それだけのこと。

ロレンスは，間違えても，そんな観念的な旅などは金輪際，行なわないのだ。イタリアの旅だからと言って，ローマだの，水の都はベニスなどへは行か

ないのだ。ガルダ湖畔に腰をすえ，ここを拠点として，村の路次に入りこみ，土地の霊を捜がし当てるべく鼻をクンクンさせて歩き廻ったり，村人の踊りに参加したり，劇をみている観客をつぶさに観察したり，日曜日に恋人と連れ出って歩いているイタリアの男女の意識をまさぐったりしながら，**生ける原点，生ける連帯性**を求めるイタリア紀行をやらかしたのである。ロレンスの著名なる研究家であるオールデイングトンが「薄明」の序文の中でなぜ，このイタリア紀行をイタリアの「薄明」と名付けたのか，ロレンスの気が知れないなどと嘯いて，くだらない論評をやっているが，「馬鹿につける薬」はないというのはまさしく名言。なみの旅行記などと全く次元がちがうことがおわかりにならないのだろうか。「イタリアの薄明」は，イタリアの歴史や史蹟を満載した旅行ガイドブックでもなければ，その国の風物を豪華絢爛，眼前にほうふつさせ，眩惑させる空虚な美文で画かれた紀行文でもないのだ。「薄明」とは光とも暗黒ともつかないものなのだ。光は一方の側に集中して純粋に輝き，暗黒はその裏側に集まる。いづれも他を含まず，そのあるべき位置にあって，完全な対立状態にあるのだ。キリスト教と異教の如くにだ。光と暗黒という二者の全き分離を求めながら同時に二者の美しき結合を求める二元的な「薄明」こそ，ロレンスがイタリアで追求した，キリスト教と異教の架橋たる「聖霊」を意味しているものなのだ。そして，それはまた，哀れ，自我の神を崇拝し，無意識に，感覚に依拠して生きている暗闇のイタリアが，他我の神のみを唯一絶対とする北方民族による自我潰滅のシンボルである機械によって，強姦され，ギラギラと照りつける白日のもとに，その頼りなげな裸身を無理矢理，さらけ出されようとする，寸前の痛ましい哀切極りなきイタリアの運命が「薄明」として名付けられた理由の一部であるかも知れない。余りの痛ましさに，イタリアのことを考えるとロレンスは無感覚になってしまうのだ。だが，今迄に，ロレンスのしり馬にのって己れ自身が「イタリアの薄明」をどう読みとり，どう感じとったかについて，ロレンスの述べたことを，いけ洒蛙洒蛙と，恥づかしくもなくそのまま反復してまとめて来たイタリアについてのこのお話は遠い，遠い大昔のイタリアのことなのだ。その後，イタリアはロレンスの期待と願望に反して，国家主義と商業主義に偏向してファシズムを信奉して，現代「文明」路

線に乗っかってしまったのだ。

「イタリアの薄明」には「山越えしつつ見る十字架」を始めとして，「ガルダ湖畔にて」「流浪するイタリア人」「帰路」の四章が収録され，うち「ガルダ湖畔にて」はさらに七つのセクションに別たれている。そして，それぞれが独立はしているが，全体として一つにまとまっているものである。ロレンスの詩やエッセイの一つ一つは，それ自体の別個の生命を持ちながら，しかも互いに他の全部と結びついて一つにまとまる中心核へと溶解するのだ。「**生ける完全性**」，「**生ける連帯性**」を唯一の中心極として，**頭脳**と**心臓**と**生殖器**から吐き出された生きた思想であり，生きた真理なのだ。「息子と恋人」の中で一旦は**死**んで，甦ったロレンスによる**三位一体**の視点から喝破されたキリスト教史であり，異教の歴史であり，ヨーロッパの意識の流れであり，**自我と他我を結ぶ**「**聖霊**」という新しき神を求めた凄絶な**意識探究**の旅こそが，このイタリア紀行なのである。

精神と**肉体**の結婚から生まれた意識による新しき観念は，新しい言葉で表現されなければならない。古い観念には古臭く浸蝕され，風化された言葉で充分であろう。だが新しい観念には新しい言葉が不可欠なのだ。自我の神や，他我の神を the I, Not-Me, Me と，ロレンスが表現している理由がここにある。難解な理由の一つでもある。難解な理由のもう一つは我々自身の側にある。我々は古い観念を固守して，慣習の中に安住し，己れの**理解された自我**を堅持して，現代の神，財宝神を頭上に戴いて**金銭存在**，**人格存在**となって，錯誤的な人生を生きているからである。そこには未来など無いのだ。崩壊の悲惨な運命が待ちかまえているのみ。一旦は死んで甦らなければならないのだ。甦って，求めるもの…それこそが我々の**生の完全性**であり，**生の連帯性**なのだ。これのみが我々の**未来**であり，生き生きと，ダイナミックに息吹きする**生きた真理**なのだ。「息子と恋人」において苛酷な分解と崩壊を経て，甦ったロレンスが，新しき神と新しき人生を求めて探究したものが，この「薄明」なのである。